

エネルギーあふれる福島県のお産婆さんたち

廣田 英子

福島県立医科大学看護学部母性看護学・助産学担当教員

私は長らく施設助産婦として働いていました。その当時は恥ずかしいことに、大先輩であるお産婆さんについては、テレビドラマで産婦さんが産気づき「お産婆さんと呼んで！」と誰かが叫び、そして登場する人という、そんな貧しい認識のみでした。

一昨年の4月から教員となり、福島県のお産婆さんたちのこれまでの活動の経緯と技の調査を行っています。実際に一人ひとりのお産婆さんたちに会い、たくさんのお話をうかがっています。お話を聞くたびに大きな発見があり、この先輩たちが私たち助産婦の歴史を切り開き、積み上げてきてくれたのだ、ということを再認識しています。

福島県のお産婆さんたち

福島県は海に面した浜通り地方、雪深い会津地方、そして中通り地方と、大きく特色のある3つの地域に分かれています。山あり谷あり、自然が豊かです。お産婆さんを訪ねて行く途中で道に迷ってしまった時、どこで道をたずねても、人々は「あ、あのお産婆さんね」と、お産婆さんのことをよくご存知で、親切に道を教えてくださいました。

お会いしたお産婆さんは、みなさん魅力的な人たちばかりでした。第一線を退いた後でも、自分の仕事に対する自信と誇りをなくしていません。使っていた道具なども見せていただきました。それは、大切に保存されていました。

インタビューの中で、印象深い出来事の話にな

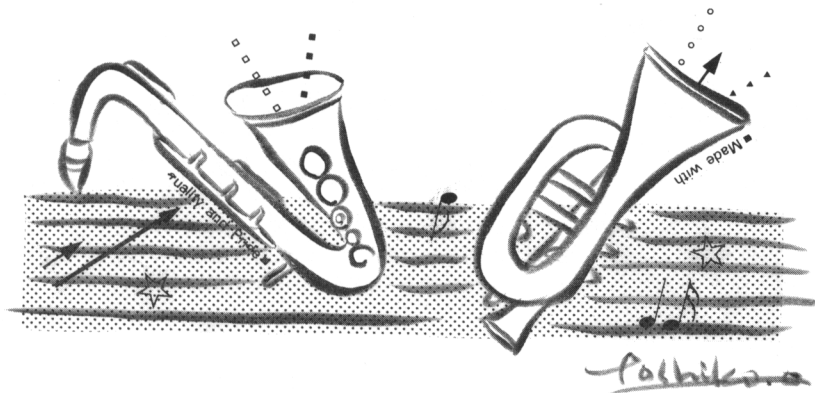
ると、堰を切ったようにお産婆さんの口から次々と言葉があふれ出てきました。ドラマチックな話に、私も一緒に驚き、笑い、涙しました。

お産婆さんになった動機は、みなさん様々です。「食べ物が十分になく、産後は梅干しとお粥だけ。栄養状態が悪いお母さんたちを見ていて、何とかしなければと思った」という、明確な動機の方もいました。そして、みなさん共通して持っていたものは、産婆としての「使命感」でした。

産婆免許取得に向けての行動はエネルギーで、東京行きの汽車に乗るために、1日かけて歩いて山越えをしたという方もいました。東京のお産婆さんの門を自らたたき修業に専念、そしてついに資格取得、その後故郷に戻って開業して夢を実現させたそうです。

昔は自然の脅威は、大変なものでした。雪で道路が遮断されて、思うように動きがとれない時は、役場の消防の人と連絡を取って対応したりもしたそうです。異常時でも、医師との信頼関係が十分保たれていたため連携もよく、迅速に対応していたようです。困難なことが起こったときは、解決のために、人や施設などのあらゆる社会資源を活用していました。その時代でできること、あるものを最大限に利用して、お母さんと赤ちゃんにきめ細やかなケアを提供していたことがよくわかりました。

お産婆さんは多忙をきわめていたことも知りました。午前中は褥婦さんのケアと赤ちゃんの沐浴、午後は妊婦さんのケア、その間に産婦の家まで何時間も歩き、たどり着いてお産介助と、一日



がめまぐるしく回っていました。

● お産婆さんは妊娠・分娩以外にも、いろいろな相談を受けていました。地域社会に生きる人々の生活を把握し、「産む人一人ひとりに寄り添うケア」をしていました。そんなすばらしい仕事ぶりを聞いて、私は感激しました。

職業生活と家族

戦前は、女性が仕事を持つことは簡単なことではありませんでした。産婆の免許を取得しても、「収入は十分あるのだから、家にいてほしい」などと家族から言われ、それでも産婆業を続けたという人もいました。結婚して家業の農業に従事しなければならず、一度は産婆業を断念しなければならない人もいました。様々な葛藤を経ながらも、自律して自分の人生を選択し、産婆として生きることを決定していました。

私が学んだこと

産婆さんの伝統的な技には、後世に残しておきたい、すばらしいものがたくさんありました。その事実を知ると同時に、私が生まれ育った福島県の地域への理解を深めることもできました。福島県の地域文化、特性など、魅力を再認識し、故郷に愛着を持つことができました。

まもなく 90 歳を迎えるお産婆さんたちは現在、第一線から離れています。しかし毎日、何事にもチャレンジする精神を持ち続けています。私たち

の「よいお産を考える会」という福島県内の助産婦を中心とした研究会にも主体的に参加して下さっていて、その発言には説得力があります。

また、産婆をしながらも、ある方は 60 歳を過ぎてから書道の師範の免許を取得し、今度は油絵を始めようという方もいます。年を重ねながらも、あふれるエネルギーを他者にふりそそいで下さる存在です。私もそのエネルギーをいただきました。60 歳からまたもう 1 つ、90 歳からもう 1 つの人生が送れるのだと、人生に対する私の考え方にも広がりが出てきました。

戦前期の女性が仕事を持つことが困難だった時代に、「産婆」という職業を選択してきたことを後悔される方は、ほとんどいらっしゃいませんでした。女性として仕事を持ち、社会の中できちんと評価され、一定の地位を確立して、自己実現をしつつ生きてきたお産婆さんたちは、一線を退いた後も人生に対してとても前向きで、生き生きと満足感あふれる日々を送っていらっしゃいます。

そんなお産婆さんたちから刺激を受け、私自身、どうしたら納得できる人生を送ることができるのだろうか、問い続ける日々です。また、現代の多くの女性たちにも、このお産婆さんたちのように、自己を実現して満足できる人生を送って欲しいと願います。

今回は野澤美江子さんにバトンを渡します

(ひろた・えいこ)